

小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第十三卷

角川書店

中 勘 助全集
第十三卷



昭和四十年十一月二十日 初版發行

定價 一五〇〇圓

著者 中 勘 助
なか かん すけ

發行者 角 川 源 義
かくがわ げんぎ

印刷者 中 内 あ き 子
なかうち あきこ

製本者 鈴 木 俊 一
すずき しゅんいち

發行所 株式會社 角 川 書 店
かどがわ しよてん

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話東京(總)七二一(大代表)

© K. Naka 1965

Printed in Japan

落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

隨筆

三

短篇 (八)

三九五

るりの死

三九七

風のごとし

四〇〇

やどかり

四〇四

ひがん

四〇六

タゴの夢 三四十年前海岸の家で飼つた犬

四〇九

インドの古美術

四一一

ひざ

四一四

織 姫

護 符

彫 像

姥 酒

交遊抄

讀書について

あの山あの川

このごろ

短 歌

中 勘助年譜（續）

あとがき

中
和

四九

四二

四三

四六

四〇

四三

四五

四六

四七

四〇

四三

隨 筆

昭和二十八年五月二十九日

つづき。

それから窓からの眺めは稍廣い視野、雲の幕、ところどころの雨。列車はさびしくらゐすいてゐる。豊橋へんでは海よりのほうだけ晴れあがつて青空も現れたけれどちぎにまた黯澹としてしまつた。しかし私たちの氣もちはむしろ輕かつた。□□□子さんに會ふことができた。□□子さんがあんなに喜んだ。一時的にせよ病苦が和いでゐた。まあよかつた そんな言葉を私たちは時どき思ひ出したやうにいひあつた、思ひ出すまでもなく頭にこびりついてゐるのをめいめい獨りで嚙みしめてゐるあひまあひまに。……雲に視界を狭められた濱名湖はかへつて涯のしれない水を思はせてよかつた、服織に疎開中冬きて新所に一泊、翌日名に負ふ遠州風に凍えながら三ヶ日まで歩いて氣賀に二泊、氣賀から湖邊を掛川へ出て服織へ歸つたので湖水の姿はおほよそ知つてゐるのだけれども。静岡へは暮れきらないうちについた。今度はタクシーもある。小雨がふつてゐる。荷物はあるし縣道から田の畦へおりとこで走らないやうに少し手まへの小路へ曲る角で車をとめる。鞆をさげた私は風呂敷包みを抱へた和子に洋傘をさしかけてもらつて先に立つ。またしても重い。出来るだけ急いで通ひなれた別荘の玄關についた。汗。私たちはいつもの奥座敷にとほされて心おきない歓迎をうけた。皆がかはるがはる出てきて挨拶をする。石上さん、奥

さん、幸子さん、喜久子さん、昌ちゃん、すこし遅れて豊子さん、和子ちゃんもこれまでみたいにははにかまなかつた。教へられたのでもあらうが、それだけ大きくもなり、また久びさで逢ふことに馴れたのかもしれない。昌ちゃんが八十八夜の茶をくれて 私の知つてゐる三年めの茶だといった。八十八夜の茶は中氣の薬といふいひ傳へがある。三年めといふのはいちばん若く摘まれたので私が忘れ庵の往き戻りにいつも見てたもの、たぶん壓條法で出来た木だつたらう。農家の人には常にさういふ事が問題になり、話の種子となる。疎開した頃は昌ちゃんもまだ子供だったが今はもう學校もすんで一人まへの農村青年になりつつある。石上さんの話では蜜柑と茶が復興したし山の手入れも着着進んでる様子、芽出たい、めでたい。風呂がわいたとの知らせに私がまづもらひ、さつぱりして家内とかはる。京都でも奈良でもよくして頂いたがここでは特にわが家に歸つたやうな氣安さでほつと落着く、實はもの心づいてから私はわが家の氣安さといふものをほとんど知らないのだけれども。和子ちゃんは東京から送つたシートンの動物記の第一巻がとても面白かつたらしい。全部買ったまま讀まずにあつたのを疎開のとき第一巻だけほかの本といつしよに送つた。それを見て私も家内も非常に興味をそそられた。が、東京に残したのは戦災で焼けた。その一冊である。禮狀は行違ひに私どもが京都へたつた留守へきてたが石上さんの手紙には 和子が雀躍こぎりして喜んだ とあつた。石上さんは これは先生にきいてもらへんかもしれないけれど といひ淀みながら 忘れ庵の跡に「風のごとし」といふ私の詩を石に刻んで記念にた

てたい　といふのだつた。「風のごとし」は發表當時この人たちに好評だつたことはきいてゐる。私はさうなく承知した。忘れ庵のあとで椎茸しひたけを作つたらよく出来たとのこと。

椎茸のあと味よろし忘れ庵

お手製の柏餅とかきもちを御馳走になる。茶がうまい。机の下に半分はひり上半身を外へ腹んばひになつて本を讀んでた和子ちゃんほうつぶしたままおかつぱに顔を隠して眠つてしまつた。それを氣のついた昌ちゃんが抱上げて寢床へつれていった。

いつものとほり家内は私を先に床に入れ自分は茶の間の人たちと話しに部屋を出ていった。旅の疲れが出て前後不覺に眠りに落ちた私は夜なかに目をさまして小窓から見たら雲はまだ空にひろがりながらわづかにかけた月が皎皎けうけうと照つてゐた。そのつぎはすがすがしい日本晴れの明けがただつた。

三十日

今日はあちらこちらへ挨拶や見舞ひをすまして東京へ歸る豫定のところ朝の茶の間で石上さんにもう一晚　といはれて　歸りたくないのをとめられるから困る　と居据つてしまつた。家内

ももとより異議なし。十時、麴屋さんへ挨拶にゆく。史子さんは静岡へ出て留守。宇佐美さんへゆき農事の忙しさに鬚ばうばうとして疲勞の色のみえる御主人とおばあさんにあふ。子供たちは學校、就學前の小さい人だけゐた。……

四年半の服織滞在中用足しや野菜の買出しに通ひなれた縣道を盲目になつたせんだん婆さんの見舞ひにゆく。左手に蘆科川のむかうに並んだ山も、右手に並んだ服織の山もきのふの雨に洗はれて鮮にせいせいとしてゐる。私たちはしみじみとした追想と新たな感懷に耽りながらゆつくり足を運んで婆さんの家についた。梅檀——棟——はどうに薪になつて跡形もない。入口の障子のこちらから和子が聲をかける。耳の遠い私にはきこえないが返事があつたとみえあけてはひる和子の後について私も土間へはひる。ここはもと桶屋さんがゐたとかで普通の農家とちがひとつつきが低い板敷の仕事場になつてゐる。婆さんはそこで目くらになつてからの手仕事の草履つくりをしてゐた。和子につづいて私が挨拶したら初めて氣がついた婆さんは、旦那さんもおいでやしたかね。といった。心配してあれこれと尋ねる和子に婆さんは、こしらへた草履が溜ると誰とかが町へもつていつて賣つてくれるとか、夜は娘が泊りにきてくれるとかいつた。近所に家をもつてゐる實の娘さんがある。婆さんは、旦那さんふとつたてえけん觸らしとくんない、とそうつと立上り、草履つくりの道具をよけつつ土間に立つてゐる私のそばへきて手さぐりに手頸をつかまへた。過勞や營養不足のため瘦せ衰へて服織へきた私が引續く飢餓の結果いよいよ骨と皮になつ

て東京へ歸つたのが今度二十貫にもなつて見参したのだから人たちの話の種になつたにちがひない。出来ることなら私ももとの姿に戻つた自分をひと目見せたい氣もちだ。私は腕は細いから體へ觸つてごらんさい とくると廻つて背中をむける。婆さんは兩手で肩や腕のつけの根へんを掴んでみて お相撲さんのやうになりやんしたねー といった。草履の藁屑が縫紋の羽織の肩についた。

追記。せんだん爺さんせんだん婆さんのことは「樟ヶ谷」^{くさ}「羽鳥」および全集第五卷短篇「盲目」にある。

樟ヶ谷の前田さんへ見舞ひをかねて挨拶にゆく。服織の山も川むかうの吉津へんの山もきのふの雨に洗はれて鮮にいきいきとしてゐる。さして奇もない山なみながらしみじみと懐しい。戦亂飢餓の幾年をここに過したのである。前田さんでは由夫さんは留守で妻君だけだつた。このまへとはちがつて顔色もよく元氣さうになつてお醫者さんに ぼつぼつ仕事を始めてもいい といはれたと軒下での立話し。私たちは まあよかつた と胸をなでる。病氣はもとより、農家で手がないてはしやうがない。

歸り路の左右の畑は麥刈りの最中、狐色の穂波のなから首をのばしてこちらを見るのはみんなお馴染みの顔だ。笑へるだけ笑つてゐる。こちらもなんといふこともなく笑へるだけ笑ふ。みんな年をとつた。

晝飯。鯉とあちの壽司、のりまき。食後座敷にかへり二人とも三時までうたた寝。目をさましたところへ豊子さんが茶と菓子をもつてきてくださる。

夜食。鯉のさしみ、酒、遠慮なく飲む。お祖父さんにはれて和子ちゃんわるびれもせず臺つきの杯に酒をついでくれる。それを半分ほど干して話してるところへ豊子さんがきていつぱいに注ぎたしてください。

柿畑のはうに家をもつた里子さんが挨拶に。健康明朗な笑顔は快い。

三十一日

晴。お別れの朝食をすませ椎茸梅干など好物のおみやげをたくさんもらつて歸る。車が門前まではひれないので縣道に待つてゐる。みんなそこまで見送つてくださる。笑顔。

午後歸宅。歓迎。いい旅行だつたけれどやはり一時に疲れが出た。

六月九日附□□□子さんの手紙

中先生奥様本當に有難うございました。今も嬉しく有難くてなりません。敬愛しまつる先生にお目にかかりお手を握りお目を見つめてゐることが出来ました幸せをこれから後いつまでも

心の中に溫め續けてまゐるでございませう。奥様にもお優しくして頂きお歸り際に本音が出て甘えてしまひました。お人形と鹿とお土産^{みやげ}大切に大切にしてをります。小さい繊かい念の入つた愛情をこめて造られましたこれらのいかにも中先生らしいいいお土産を私は嬉しうございませう。昔箱根か強羅でお求めになりました果物かお野菜の形をした獨樂^{こま}を先生がお廻しになる詩か隨筆かございましたのを懐しく思ひ出します。先生溫いお手紙と共に鷹の話を賜りまして有難うございました。朝日で「心」の廣告を見て買ひませうと思つてゐますところへ頂いたのでもございました。幾度も拜見致しました。舊約聖書のあるこの處も讀んでみて先生はよくかういふ着想をなされるものだと驚きます。面白くて次が楽しみですでございます。先生がおいで下さいました時から雨が毎日降りもう梅雨に入つてしまつたやうでございませう。この梅雨は忽ち體に響きまして苦しく……いろいろな事情でこの頃身心共に疲れました。先生誠に生きぬいてゆく事は苦しいもので死の方が却つてやさしいのでございませう。それでも涙と身悶えの中に上よりの細きみこゑを私の心はききとります。肉體弱き人の子として罪に泣き病ひに苦しみ人の世の悲劇の中に人間性の慘めさの中に於て神を知るのでございませうもの福音は誠に神與へ人受るものなのでございませう。それと共に先生御夫妻の御慈みや先生のお書きになりましたものと思ひますとき深く慰められるのでございませう。今日は岩波寫眞文庫の奈良を見ました。新藥師寺の森は田園に圍まれてゐるのでございませう。思はずも大きい息をしてしまふほどいいなと

思ひました。また白毫寺への道やその境内の草の徑を踏みしだいてゆくと古い門の見える寫眞は最も氣に入りました。先生御夫妻がつひの間お歩きになりましたのでせうと懷みました。又明日から降るさうでございますが今日だけ珍しく晴れましたので看護婦さんが川の土堤からまた野薔薇を一抱へ折つてきてくれました。若々しい織いすすきも添へてございました。どうか御大切になさいましていつも御丈夫でいらして下さいませ。先生長く生きていらして下さいませ。旅のお疲れはもうお癒えになりましたでせうか。さやうなら。

六月九日

□□□□子

中 勘助先生
中 和子様

追記。私は自分の佛教的——といったところで佛教をよく知らないし信者でもないのだが——無神傾向が多少なりとも□□子さんのキリスト教的信仰の邪魔になりはせぬかと心配して□□子さんには神様があるし病氣のためには立派な先生ががついてゐられるからそのうへ何もいらないやうなものだが私の手紙でも少しは慰めにでもなるなら といふやうな意味のことを手紙に書いたし、作品、特に鳩の話や鷹の話のやうな非基督教的色彩のあるものについては 自分の書

くものは何でも送つてあげる　といふ約束を履行するのにかなりな逡巡困惑を餘儀なくされたけれども、その後□□子さんの信仰の不退轉を信じて何事も自由に書き、またどんな作品でも安心して見せるやうになつた。

私あての□□子さんの私信を發表するについてはそれが私信であることがいくたびも私を躊躇させた。しかしその内容は□□子さんの著書「みこころのままに」にその本を縁として新に結ばれた私どもに對する美しい感情を書き加へた恰好のものにすぎないし、一方□□子さんは昭和二十五年で終つてゐる「みこころのままに」の發表後も進行を止めない病氣のため直接間接に起るヨブ的苦惱の生活を書き續けたく思ひながらも體力がゆるさずもどかしい氣であるらしい、私あての私信の發表は或程度その焦燥不満を和げはしないかと思ふし、現在かやうな傷ましい永年の生活のうちにかかる不動の信仰をもちつづけてゐる人があること、互にちがつた道をゆく信者と不信者のあひだにも充分に善い關係が成立し得ることを示すのは人びとにとつて決して無益なことでないといふ考へが私にむしろ異例なかういふ仕方をさせたのである。

□□子さんとの新しい交渉には序幕らしい序幕がなかつた。□□子さんのお友達といふ未知の人から突然「みこころのままに」を送られて讀んだ私たちは京都奈良方面の旅行の序に安城の病院を見舞ふことを思ひつゝいた。私としては破天荒である。それほど同情もし感激もした。面會の許可を願つた醫長先生からは「この六年誰にも會はうとしなかつたのを喜んで會ひたいといふこ

とゆゑ是非見舞つてやつて」といふ意味の返事だつた。さて會つてみると豫想を裏切つて□□子さんは初對面の多少の遠慮、羞恥の影もなくいはばいきなり私たちの腕の中へ飛込んできた。それには性格もあるかもしれない。また病院の寢臺で十數年成長した□□子さんは非常な身心の苦勞をしてるにもかかはらずある意味では世間知らずの温室育ちかもしれない。それに私たちにこそ全くの初對面でもずつと私の作品を讀んでたその胸にはそれだけの親しみ懷しみが醗酵してたであらう。クリスチャンである□□子さんは今度の私どもの邂逅があるいは攝理と考へるかもしれない、不信者の私がそれを不思議な縁と呼ばれる偶然とするところの。

二十日

漢 脩

昔むかしのはげちよろの漢脩かんよう

ひとりはなにやら吹き

ひとりはなにやら歌ひ

ひとりには長い袖をひらめかいて

わしやつんぱ聲でこえんが